

満洲文字の文字表をめぐって(15)

—音価(5)子音：満文 c, j の音価—

吉池孝一 中村雅之

はじめに

吉池：今回は、三種の古資料、『満漢字清文啓蒙』（1730年題）、『正字通』に付された廖綸璣撰「十二字頭」（1670年）、『寧古塔紀略』（1664～1681年に習得した満洲語）を検討することによって、満文 k, (p), t, c, k', ts', ts, c' に、漢語の有気音が対応し、満文 g, b, d, j, g', dz に、漢語の無気音が対応することを確認しました。

中村：このような対応をどの様に見るかということですが、17世紀の満洲語の二分法の対立は、無声有気音と無声無気音によっており、現代方言の東の満洲語（嫩江方言）と同様であったと見ても、特段の不都合は無いということでした。

吉池：そうでしたね。仮に17世紀の満洲語の二分法の対立が、西の錫伯語のように無声音と有声音の対立であったとしたならば、どうでしょう。服部四郎・山本謙吾(1956)「体系と構造」¹の錫伯語の合成語に見られたような無声有気音の無気音化や、服部四郎(1937)「一資料」²で見られたような満文 c の有気性の弱化があった場合、理屈の上では、そのような音に対して、漢語の無声無気の弱音 (lax) を当てることも起こり、対応は乱れるかもしれません。しかし、少なくとも、上の三種の資料については、そのような現象は見られません。満洲語の二分法の対立が、無声有気音と無声無気音であったと想定して特段の不都合はありません。もっとも、三資料だけでなく、十分な量と質の対音資料を集め検討したならば、新たな展開があるかもしれませんが、それは今後の課題です。

中村：我々の満洲文字の文字表に付す音価の暫定案では、ほぼ服部四郎(1937)「一資料」の音声表記によって、半有聲無気音 [b, d, g] と、無声有気音 [p^h, t^h, k^h] としているのですが、これを改めました。もっとも、表面的には変わりはありません。

17世紀の満洲語は、現代方言の東の満洲語のように、無声無気音の弱音 (lax) と無声有気音の対立であったと想定して、補助記号 [◌] を半有声音としてではなく、無声無気音の弱音 (lax) として使用します。その事を明記した上で [b, d, g] を採用し、無声有気音 [p^h, t^h,

¹ 服部四郎・山本謙吾(1956)「満洲語口語の音韻の体系と構造」『言語研究』30号、1-29頁。『服部四郎論文集第三巻 アルタイ諸言語の研究 III』三省堂、1989年、1-55頁、所収。

² 服部四郎(1937)「満洲語音韻史の爲めの一資料」『音聲の研究』第6輯、279-294頁。『服部四郎論文集第一巻 アルタイ諸言語の研究 I』三省堂、1986年、68-86頁、所収。

k^h]と対立させることとしました。十分な量と質の対音資料を集め検討するまでの暫定の措置です。

吉池：今回は、満文の破擦音 c および j の音声を、「そり舌音」[tʂ^h, tʂ]とすべきか、それとも「後部歯茎音」[tʃ^h, tʃ]とすべきか、ということについて検討しようということでしたね。

用語と音表記の斉一について

中村：先ず用語ですが、「そり舌音」「後部歯茎音」「歯茎硬口蓋音」は国際音声記号（1993年改訂，1996年更新）³の日本語訳ですが、中国の用語とはだいぶ異なります⁴。

吉池：そり舌音はこれで良いとして、中国では後部歯茎音は「舌葉音」、歯茎硬口蓋音は「舌面前音」（もしくは簡略に「舌面音」）とします。中国の舌の位置による用語は、直観で理解できて便利です。今回の議論では舌の位置による用語を使用することにしましょう。

中村：次に音の表記の問題です。中国の方言調査資料には、音声の簡略表記のものもあれば、ローマ字表記と音声の簡略表記を兼ねたものもあります。このような資料を比較する場合、不便です。

吉池：たしかに、子音が、有声か無声か、有気か無気かという点について、表面上斉一でなく不便です。今回は「そり舌音」か「舌葉音」か「舌面音」という検討ですから、声や気音の有無は直接には関わりませんが、各資料の検討の箇所、説明することにします。

なお、これ以後提示する諸文献中の帯気音の音声記号[ʰ]は、[h]に書き換えて提示します。

中村：それでは、先ずは、満洲語文語の入門・初級に利用する三つの文献で、満文の c, j に、どのような音が付されているかを確認しましょう。

三つの文献の c と j

吉池：服部四郎(1937)「一資料」、池上二郎(1955)「トゥングース語」⁵、河内良弘(1996)

³ 国際音声学会編竹林滋・神山孝夫訳(2003)『国際音声記号ガイドブック—国際音声学会案内—』東京：大修館書店。

⁴ 慶谷壽信(2000)「国際音声字母の中国流の受容」『人文学報』311、11-34頁。『慶谷壽信中国音韻学論集』(2018年)好文出版所収、547-570頁。この点について同論文が参考になる。

⁵ 池上二郎(1955)「トゥングース語」市川三喜・服部四郎(編)『世界言語概説』下巻、東京：研究社 462頁-464頁に掲載された文字表の音価。

『文語文典』⁶を見ると、そり舌音[tʂ]か、それとも舌葉音[tʃ]かは、次の通りです。

子音字	翻字	服部(1937)	池上(1955)	河内(1996)	暫定案
				口語	文語
ㄐ	c	tʃ (tʂ), ís (tɕ)	[tʂ, tʃ]	[tʂ]	/tʃ/ [tʂ ^h , tʃ ^h]
ㄐ	j	ɟʒ (ɟʒ), ɟʒ (ɟʒ)	[ɟʒ, dʒ]	[tʂ]	/dʒ/ [ɟʒ, ɟʒ]

前回、上記の表を出したときに、服部(1937)「一資料」の、[ís, ɟʒ]を、舌葉音[tʃ, ɟʒ]としました。これを舌面音[tɕ, ɟʒ]に訂正します。今回の議論からやや離れるので注で訂正の理由を書きます⁷。

中村：服部(1937)と池上(1955)と、河内(1996)の口語音では「そり舌音」で、文語音では「舌葉音」です。舌葉音とするのは、過去の満洲語音を示すもののようです。問題は、17世紀の満洲語音として、そり舌音[tʂ]とすべきか、舌葉音[tʃ]とすべきかですが、古資料の検討の前に、まずは現代方言がどのようなものであるか見てみましょう。

現代方言のcとj

吉池：満文cとjに対応する現代方言の音声について、次の調査資料を確認します。

服部四郎・山本謙吾(1956)「体系と構造」、清格爾泰(1982)「口語語音」⁸、李樹蘭・仲

⁶ 河内良弘(1996)『満洲語文語文典』京都大学学術出版会。助編者は清瀬義三郎則府、愛新覚羅 烏拉熙春 両氏。

⁷ 服部(1937)「一資料」は、五つの民族のインフォーマントにより、満洲語文語の第一字頭の読音を調査したもの。その内、c, jに関係する部分を抜き出すと次の通り。

メレンドルフの (1)満洲人 (2)新バルガ人 (3)新バルガ人(ハルハ方言) (4)ダグール人 (5)ソロン人
ローマ字

ca	tʃa	sa	tsa	tʃa	tsa
ce	tʃə	sə	tsə	tʃə	tsə
ci	tsi	si	tsi	tsi	tsi
co	tʃo	so	tso	tʃo	tso
cu	tʃu	su	tsu	tʃu	tsu
cū	tʃō	sō	tsō	tʃō	tsō

(1)満洲人は、母音iの前で[ts]とし、それ以外はそり舌音の[tʃ]とする。(4)ダグール人は、母音[i]の前で[ts]とし、それ以外は舌葉音の[tʃ]とする。両者の区別の仕方は平行した関係にある。そこで、仲素純(1982)『達斡爾語簡誌』(北京：民族出版社)に依ってダグール語の調査を見ると、「舌葉音 dʒ, tʃ, ʃは、母音 i, ii, e, ee の前で、舌面音 [tɕ]、[tɕʰ]、[c] となる。」(舌葉音 dʒ, tʃ, ʃ在元音 i, ii, e, ee 前面時變讀爲舌面音 [tɕ]、[tɕʰ]、[c]。)4頁とある。母音[i]を含む前舌の狭い母音の前で、舌面前音 [tɕ] となり、それ以外は舌葉音 [tʃ] とする。これにより、(4)ダグール人の tsi を [tɕi] として良く、そうであるならば、(1)満洲人の [ts] も [tɕi] として良い。

⁸ 清格爾泰(1982)「満語口語語音」『内蒙古大学学报(哲学社会科学版)』。(1998)『清格爾泰 民族研究文集』232-355, 北京：民族出版社所収による。

謙(1986)『錫伯語簡誌』⁹、趙傑(1989)『滿語研究』¹⁰、愛新覺羅烏拉熙春(1992)『語音研究』¹¹。

中村：服部四郎・山本謙吾(1956)「体系と構造」と李樹蘭・仲謙(1986)『錫伯語簡誌』は西の満洲語です。それ以外は黒龍江省の東の満洲語です。東西で違いが有るかどうか、興味深いところです。まずは、服部四郎・山本謙吾(1956)から確認しましょう。

服部四郎・山本謙吾(1956)「体系と構造」

吉池：服部四郎・山本謙吾(1956)「体系と構造」から引用すると次のようです。なお、引用文の[tʂ], [dʒ], [tʃ], [dʒ]は音声の簡略表記です。精密表記は[tʂ^h], [dʒ^h], [tʃ^h], [dʒ^h]とします。そこで、引用文以外の箇所では、[tʂ^h], [dʒ^h], [tʃ^h], [dʒ^h]とします。

「破擦音音素に該当する音はそれに続く母音によって調音の仕方が異なり、2種に大別できる。

1 そり舌破擦音 (β^{ef}) : [tʂ], [dʒ]

2 舌背破擦音 (γ^{fg}) : [tʃ], [dʒ]

/i/の前では[tʃ][dʒ]が、その他の母音の前では[tʂ][dʒ]が該当する。

例：/caa/[tʂaː]「挿せ！」

/cesərəmə/[tʂsərəmə]「すべる、スケートする」

/cunuku/[tʂunkw]「枕」

/'uncu/[ʔuntʂw]「異なる」

/cii/[tʃiː]「碁（＜シナ語 碁）」

/ciaa/[tʃaː]「お茶」

/ciorə/[tʃor]「明後日」

/tacimə/[tatʃim]「習う」

/'erəci/[ʔɜrtʃ]「ここから」

/jaa/[dʒaː]「易しい、安い」

/jemə/[dʒəm]「食べる」

/juu/[dʒuː]「2」

/jii/[dʒiː]「～の子」

/jiasə/[dʒas]「棚」

/jiorimə/[dʒørim]「指す」

/banjimə/[bandʒim]「生む、生まれる；暮す」

/sahənji/[saxəndʒ]「狼, 少女」

」(10頁)

⁹ 李樹蘭・仲謙(1986)『錫伯語簡誌』北京：民族出版社。

¹⁰ 趙傑(1989)『現代満語研究』北京：民族出版社。

¹¹ 愛新覺羅 烏拉熙春(1992)『満洲語語音研究』京都：玄文社。

中村:[tʂʰ][dz]を/c//j/と解釈し、[tʃʰ][dʒ]を/ci//ji/と解釈しています。二種の音声[tʂʰ]と[tʃʰ]（および[dz]と[dʒ]）を異音と見なすということですね。

吉池:/caa/[tʂʰaʰ]《挿せ!》と/ciaa/[tʃʰaʰ]《お茶》は、音声[tʂʰ]と[tʃʰ]によって意味が異なる最小対です。話し手と聞き手は、[tʂʰ]と[tʃʰ]を異なる音として認識し利用したと見ても、不都合はありません。そうであるならば、/caa/と/ciaa/ではなく、/tʂʰaa/と/tʃʰaa/と理解することも可能です。

中村:服部氏は、/ciorə/[tʃʰor]《明後日》、/jiasə/[dʒas]《棚》、/jiorimə/[dʒerim]《指す》の[tʃʰ]と[dʒ]も、/i/の前の音と解釈しますが、/i/に相当する音声の[i]は有りません。吉池さんは、これを/tʃʰ/と/dʒ/とするわけですね。この点について、黒龍江省の満洲語、即ち東の満洲語を調査した清格爾泰(1982)「口語語音」はどのようでしょう。

清格爾泰(1982)「口語語音」

吉池:清格爾泰(1982)「口語語音」にはローマ字表記の語彙集が付されています。tʂやtcなどの音声の精密表記を[tʂʰ]と[tcʰ]とするので、そのように書き変えます。dzやdzなどの音声の精密表記を無声無気の弱音とするので、[tʂ]と[tc]に書き換えます。先ず満文cに相当する音にどのような母音が後続するかを見ると次の通りです¹²。

<満文c>

語頭[tʂʰ] + [a, ʊ, ɔ, u, ʊ]

語中[tʂʰ] + [ʊ, ʌ, ɭ, u, a, ɔ, o]

語頭[tcʰ] + [æ, e, i, y]

語中[tcʰ] + [i, e]

中村:[tʂʰ]には、[a, ɔ, u, ʊ, ʊ, ʌ, ɭ, u, o]が後続し、[tcʰ]には[æ, e, i, y]が後続し、後続する母音によって、[tʂʰ]であるか、それとも[tcʰ]であるかが決まるようですね。この点は、服部四郎・山本謙吾(1956)「体系と構造」の錫伯語とは異なります。満文jに相当する単語はどのようでしょう。

¹² 以下に語形を示す。

語頭[tʂʰ]: [tʂʰa]茶、[tʂʰatʂʰari]帳房、布涼棚、[tʂʰuutʰiur]抽屜、[tʂʰɔmpɔɔ]腰眼、肋下軟処、[tʂʰuma:ʋa]明天、[tʂʰɔʋa:]兵。語中[tʂʰ]: [amtʂʰume]赶上、[a:tʂʰɔme]会见、合好、[a:tʂʰɔn]合伙、大伙、[atʂʰpume]配、按、[untʂʰu]另外、[itʂʰappa]美味、合適、[ɔntʂʰɔ:]寬、[fatʂʰɭʋɔn]乱、紊乱、[fetʂʰyulume]燎、烤、[gʊtʂʰkʰu:r]蟒緞、[ku:tʂʰo]朋友、伙伴。

語頭[tcʰ]: [tcʰælqɔn]雀紅、朱頂紅、[tcʰemteʰe]旗袍、[tcʰia:skʰun]背臉、背、[tcʰitʰikʰu]鳥、雀、[tcʰytcʰhyme]出去。語中[tcʰ]: [ila:tcʰi]第三、[i:tcʰe]右、[itʰime]染色、[mitʰkʰen]淺、淡(色)、[metʂʰan~metʰiæn]槍、鳥槍。

吉池：次の通りです¹³。

<満文 j>

語頭[tɕ] + [a, ɔ, u, u]

語中[tɕ] + [u, u, a, o, (i)]

語頭[tɕ] + [æ, e, i]

語中[tɕ] + [i, (ɣ), (w), y, e]

中村：[tɕ]には[a, ɔ, u, u, o]が後続し、[tɕ]には[æ, e, i, u, y]が後続します。後続する母音によって、[tɕ]であるか[tɕ]が“ほぼ”決まるようですが、[tɕ]と[tɕ]に、同一の母音[u]が後続し、子音によって対立しているように見えます。これを、どのように理解しますか。

吉池：[tɕ]に[u]が後続する単語の例は多数有ります。例えば、[tɕume]吃、[tɕu:lun]黄羊、[tɕutɕhun]辺疆、などです。しかし、[tɕ]に[u]が後続する単語は、[urkuntɕume]歡喜、の一例のみです。この一例は、文語 *urgunjembi* に相当します。そこで、文語 *jembi* を持つ口語を、清格爾泰(1982)「口語語音」に付された語彙集から抜き出すと次のようです。

文語 *efujembi*—口語 [uptɕi:me] 壞, 敗壞

文語 *ejembi*—口語 [utɕume] 記

文語 *injembi*—口語 [intɕime] 笑

文語 *jembi* には、口語 [tɕi:me]、[tɕume]、[tɕime] が対応します。これより推察するに、[urkuntɕume] の [tɕume] は、[tɕume] もしくは [tɕime] の誤記・誤植と見て良いでしょう。

¹³ 以下に語形を示す。疑義のある箇所については、参考までに、清格爾泰(1982)と関係の深い恩和巴圖(1995)の語形を【】を付す。清格爾泰(1982)は1961年に黒龍江省富裕県友誼郷三家子村の満洲語口語を調査した際の資料で、調査者は、清格爾泰、金啓琮、白音朝克圖、恩和巴圖の四人。恩和巴圖(1995)は、清格爾泰(1982)の調査資料と、1961年以降の同地域に於ける調査をまとめたものとのこと。

語頭[tɕ]：[tɕa:lun]世, 時代、[tɕɔulpume]填滿, 使滿、[tɕume]吃、[tɕɔpume]愁悶, 勞苦、[tɕuan]十。語中[tɕ]：[aqtɕun]雷、[utɕun]主、[itɕa]虻、[u:tɕo]頭、[pɔltɕo:n]波浪、[va:tɕɔɔ~va:tɕɔɔ]完了、[sɔntɕime]選擇*【*恩和巴圖(1995)は[sɔntɕime]とする。[tɕ]は[tɕ]の誤か】。

語頭[tɕ]：[tɕæ:lime]躲、[tɕelpirme]禱念、[tɕiarma]蝸蝸、[tɕiptɕhia]皮襖。語中[tɕ]：[aitɕik]小、[ɔtɕɔɔ]不行*【*恩和巴圖(1995)は[ɔtɕukhu]とする。[tɕɔ]は[tɕu]の誤か】、[æltɕime]離開、[urkuntɕume]歡喜*【*恩和巴圖(1995)は *uryunteime/urkuntɕume*】とし2語形を提示する】、[utɕien]重、[p^hitɕiæn]皮箱、[vuitɕy:ɔ]活了、[taltɕia:ɔ]不相干、[tuɕten]灯、[suitɕe]緞子袖子。

中村：清格爾泰(1982)「口語語音」の[tʂʰ, tʂ]と、[tɕʰ, tɕ]は、後続する母音の異なりによって、いわゆる“補い合う分布”をしており、同一の音韻であったと理解することができます。東の満洲語では[tʂʰ, tʂ]と[tɕʰ, tɕ]を同一の音韻とし、西の満洲語では[tʂʰ, dz]と[tɕʰ, dz]を異なる音韻とする、というような事が有ったかどうか、興味深いところです。

服部四郎・山本謙吾(1956)「体系と構造」と同じく、西の満洲語である李樹蘭・仲謙(1986)『錫伯語簡誌』の状況はいかがでしょう。

李樹蘭・仲謙(1986)『錫伯語簡誌』

吉池：満文 c, j に相当する李樹蘭・仲謙(1986)『錫伯語簡誌』の音声の状況を確認します。本書にはローマ字表記による語彙集が付されていますが、音声の精密表記には、例えば tʂ は[tʂʰ]、dz は[tʂ]とあります。破裂音と破擦音は全て同様です。なお無声音の[tʂ]などについて、有声性が認められる記述があるので¹⁴、[dz]などと有声音に書き換えます。この書き換えは勝手な操作ではありますが、「そり舌音」か「舌葉音」という議論には関わらないので、音声の比較を複雑にしないための便宜です。

満文 c は次の通りです¹⁵。なお、この文献では、[i]を音韻的な表記として用いており、音声[i]と[ɿ]の両者を表します。そり舌子音に後続する母音 i は[ɿ]¹⁶です。

<満文 c>

語頭[tʂʰ] + [a, o, u, ə, ə, i[ɿ]]

語中[tʂʰ] + [ə, u, a]

語頭[tɕʰ] + [i, ə, o, ə, y, a, u]

語中[tɕʰ] + [i]

中村：[tʂʰ]には、[a, o, u, ə, ə, i[ɿ]]が後続し、[tɕʰ]には[a, o, u, ə, ə, y, i]が後続します。[tʂʰ]と[tɕʰ]には同一の母音が後続し、子音によって対立しています。これは、服部四郎・山本謙吾(1956)「体系と構造」と同様です。満文 j に相当する単語はどのようなでしょう。

¹⁴ 無声摩擦音の x [x] と χ [χ] は、母音に挟まれたり、有声子音 [m, l, n, r, v] と母音に挟まれたりすると、有声摩擦音の [ɣ] と [ʁ] となる現象がある。このように有声音化する現象は、母音と、無声無気音であるはずの d [t] に挟まれても見られる。無声無気音とされる d [t] が、有声音と同じ働きをするわけであるから、実際は有声音の [d̥~d] であったと見ることができる。そうであるならば、無声無気音の b, d, g, c, dz, dz, dz [p, t, k, q, ts, tʂ, tɕ] の内、d [t] だけを有声音とするのではなく、他の無声音も有声音であったと見ることができる。

¹⁵ 語頭[tʂʰ]：[tʂʰar anj]前年、[tʂʰoqʰo]鷄、[tʂʰuaŋ]床、[tʂʰærj]夏、[tʂʰəkʰsənəŋ]昨天、[tʂʰis]尺。語中[tʂʰ]：[itʂʰə]初一、[miautʂʰun]槍、[guŋtʂʰandaŋ]共産党。

語頭[tɕʰ]：[tɕʰiyɿan]泥、[tɕʰənəŋdzi]前天、[tɕʰorw]後天、[tɕʰærkʰə]蟋蟀、[tɕʰyean]蚯蚓、[tɕʰanbi]鉛筆、[tɕʰul]球。語中[tɕʰ]：[qʰutɕʰin]井。

¹⁶ 「元音 i 在輔音 dz, tʂ, ʂ, z後讀作舌尖元音[ɿ]」(6頁)。この「tʂ」の音声は[tʂʰ]。

吉池：次の通りです¹⁷。

<満文 j>

語頭[dz] + [u, a, o, ə, i[ʌ]]

語中[dz] + [u, a, ə, i[ʌ]]

語頭[dz] + [i, a, ə, y]

語中[dz] + [i, ə, a, y]

中村：[dz]には、[u, a, o, ə, i[ʌ]]が後続し、[dz]には[a, ə, ə, y, i]が後続します。
[dz]と[dz]には、同一の母音が後続し、子音によって対立しています。これも、服部四郎・
山本謙吾(1956)「体系と構造」と同様ですね。

吉池：李樹蘭・仲謙(1986)『錫伯語簡誌』の満文 c, j に対応する音声の状況は、服部四郎・
山本謙吾(1956)「体系と構造」と同様で、[tʂʰ, dz]と[tɕʰ, dz]を、そり舌/tʂʰ, dz/と舌面
/tɕʰ, dz/の二種の音韻と理解することができます。

中村：趙傑(1989)『満語研究』はどのようなでしょう。

趙傑(1989)『満語研究』

吉池：趙傑(1989)『満語研究』は、黒龍江省泰来県大興(嫩江沿岸)で行なわれた調査です。
先に見た清格爾泰(1982)「口語語音」と同様に、嫩江方言です。語彙集は付されていないの
で、「現代満語(依布氣音)音節配合表」(69頁)の記述によって、[tʂʰ, tʂ] [tɕʰ, tɕ]
と母音とのつながりを確認すると次の通りです。

- ・[tʂʰ, tʂ]には母音[ʌ, u, a, ʌ, o, uɛ, uɔ]が後続する。
- ・[tɕʰ, tɕ]には母音[i, y, ie, ia, io]が後続する。

中村：後続する母音によって[tʂʰ, tʂ]であるか、[tɕʰ, tɕ]であるかが決まる(母音の違いに
よって補い合う分布をしている)ので、音声[tʂʰ, tʂ]と[tɕʰ, tɕ]を、一種の音韻/tʂʰ, tʂ/
であると理解することができます。これは、先に見た清格爾泰(1982)「口語語音」と同様です。

なお、黒龍江省の満洲語には2つの大きな方言があるとされます。黒龍江沿岸の黒龍江方
言と、嫩江沿岸の嫩江方言です。趙傑(1989)『満語研究』と清格爾泰(1982)は嫩江方言なの

¹⁷ 語頭[dz] : [dzuxo] 冰、[dzai anj] 明年、[dzorɣun bia] 十二月、[uɕin dzikʰw] 糧食、
[dzəpɫəm] 蒸。語中[dz] : [audzun] 雷、[idzi iɣan] 犏牛、[damdzənnimayɣ] 螞蟻、[budzan] 森
林。

語頭[dz] : [dzidər anj] 明年、[dzappʰi] 姜、[dzəɕɣən] 信、[dzyɕxun] 酸。語中[dz] : [fədzirxi]
下面、[tɕʰyndzə] 辣椒、[gidzaləm] 撕、[cəndzɣim] 挑選。

で、次に、黒龍江方言の状況を知りたいところです。

愛新覺羅烏拉熙春(1992)『語音研究』

吉池：残念ながら、手もとに黒龍江方言の調査資料はありません。愛新覺羅烏拉熙春(1992)『語音研究』は、黒龍江方言と嫩江方言を調査したもののようです¹⁸。黒龍江方言と嫩江方言の母音と子音の体系は基本的に一致するとし、差異が明らかな個所は区別して説明するとのこと。愛新覺羅烏拉熙春(1992)には語彙集は付されていませんが、諸子音の説明に使用される語例のうち、満文 c に対応する単語の音声は次の通りです¹⁹。

<満文 c>

[tʂʰ] + [ɔ², u, a, ʌ, a², ɔ²]

[tʃʰ] + [i, ɔ², a]

中村：[tʂʰ]に[ɔ², u, a, ʌ, a², ɔ²]が後続し、[tʃʰ]に[i, ɔ², a]が後続します。[tʂʰ]と[tʃʰ]に、同一母音の[a]と[ɔ²]が後続し、子音の違いによって対立しています。これは、嫩江方言の清格爾泰(1982)「口語語音」や趙傑(1989)『満語研究』とは異なり、西の錫伯方言と同様です。

愛新覺羅烏拉熙春(1992)『語音研究』は、黒龍江省の黒龍江方言と嫩江方言の両者によるとのことですが、単語の語形において、嫩江方言の清格爾泰(1982)と、どのような違いがあるか気になるところです。

吉池：挙例の中の、[tʃʰɔ²qʰo]不樂意は、清格爾泰(1982)「口語語音」に[tɕiva:ʷɣu]不願意とあり、[u²tʃʰame]蛻, 脱は、清格爾泰(1982)に[uktʂa:me]脱開, 擺脫とあります。[tʃʰaŋna]嬉歡に対応する語形は清格爾泰(1982)には有りません。

中村：愛新覺羅烏拉熙春(1992)『語音研究』にあつては、特段の注記がない限り、黒龍江方言と嫩江方言は同一のはずです。しかし、[tʃʰɔ²qʰo]と[u²tʃʰame]は、清格爾泰(1982)「口語語音」の嫩江方言とは語形がやや異なるのですが、これはどういうことでしょうか。あるいは

¹⁸ 黒龍江方言（黒龍江沿岸の方言）の調査地点として孫吳県四季屯、愛琿県大五家子郷、遼克県松樹溝郷興隆村の三地点を挙げる。嫩江方言（嫩江沿岸の方言）の調査地点として富裕県三家子屯、泰来県依布齊村の二地点を挙げる。黒龍江方言の代表は孫吳県の四季屯（黒龍江沿岸）であり、嫩江方言の代表は富裕県の三家子屯（嫩江沿岸）であるとする。「据調査結果表明，集中反映嫩江方言特點的，當以三家子屯為代表；集中反映黒龍江方言特點的，當以四季屯為代表。」（7-8頁）。

¹⁹ 語頭[tʂʰ]：[tʂʰɔ²qʰɔ²]鷄、[tʂʰulame]炒、[tʂʰamtʃʰe]旗袍、語中[tʂʰ] [aʰtʂʰme]馱、[fɛ²tʂʰaŋa]胡亂、[kʰɿtʂʰukʰu]可怕、[tʃʰiptʂʰa²]皮襖、[saʰtʂʰme]砍、[pɔŋ²tʂʰɔ²]棒槌。語頭[tʃʰ]：[tʃʰitʃʰkʰɔ]雀、[tʃʰɔ²qʰo]不樂意、[tʃʰaŋna]嬉歡、語中[tʃʰ] [qʰɔ²tʃʰe]井、[u²tʃʰame]蛻, 脱、[mutʃʰin]鍋。

[tʃʰɑŋna]も含めて、黒龍江方言を反映しているのかもしれませんが。注記が無いとのことなので不確かですが。愛新覺羅烏拉熙春(1992)の満文 j に対応する[tʃ]と[tʃʰ]の語例はいかがでしょう。

吉池：次の通りです²⁰。

満文 j

[tʃ] + [ɔ', a', u', ɿ, ɔ, a', ʁ]

[tʃʰ] + [i, ə, a, y, ə', e]

中村：[tʃ]に[ɔ', a', u', ɿ, ɔ, a', ʁ]が後続し、[tʃʰ]に[i, ə, a, y, ə', e]が後続します。[tʃ]と[tʃʰ]に、同じ母音[a]が後続するので、子音によって対立しています。これは、嫩江方言の清格爾泰(1982)「口語語音」や趙傑(1989)『満語研究』とは異なり、西の錫伯方言と同様です。

吉池：挙例の中の[tʃarma]蝸蝸は、清格爾泰(1982)「口語語音」では[tʃiarma]とします。[pantʃava]生了は、趙傑(1989)『満語研究』では[pantʃiyə]とし、清格爾泰(1982)「口語語音」では[pantʃiɿa]とします。清格爾泰(1982)と趙傑(1989)の嫩江方言と、愛新覺羅烏拉熙春(1992)『語音研究』とはやや語形が異なります。

中村：黒龍江方言が反映しているのかもしれませんが、注記が無いので、何ともいえませんね。

吉池：以上に拠ると、清格爾泰(1982)「口語語音」と趙傑(1989)『満語研究』との嫩江方言では、[tʃʰ, tʃ]と[tʃʰ, tʃ]は、後続する母音によって補い合っているので、一つの音韻/tʃʰ, tʃ/であり、狭い母音が後続すると口蓋化し異音として[tʃʰ', tʃ]となると理解することができます。それに対して、服部四郎・山本謙吾(1956)「体系と構造」と李樹蘭・仲謙(1986)『錫伯語簡誌』の錫伯方言では、[tʃʰ, dz]と[tʃʰ, dz] (李樹蘭・仲謙(1986)は[tʃʰ, dz]と[tʃʰ, dz])は、同一と見なし得る母音が後続し、子音によって対立しているので、二つの音韻/tʃʰ, dz/と/tʃ, dz/ (李樹蘭・仲謙(1986)は/tʃʰ, dz/と/tʃʰ, dz/)と想定して良いかもしれません。

黒龍江方言と嫩江方言の両者に依ったとする愛新覺羅烏拉熙春(1992)『語音研究』は、錫伯方言と同様で、それぞれ二つの音韻/tʃʰ, tʃ/と/tʃʰ, tʃ/を想定することができそうです。

²⁰ 語頭[tʃ] : [tʃɔ'wo] 毡子、[tʃa'qʰa] 東西、[tʃu'yu] 故事、[tʃʰtʃʰlɿχu] 不喫、[tʃɔljɔɔ] 漿、語中[tʃ] [itʃa'] 虻、[χɔ'tʃɔɔɔ] 棍子、[pɿtʃɿn] 謎語。

語頭[tʃʰ] : tʃime 来、tʃəzyʃ 信、tʃivəli 兩個、tʃəlin 因為、tʃarma' 蝸蝸、tʃi~tʃy 孩子、

語中[tʃʰ] : tamtʃə' 扁担、ujyntʃe 九十、pantʃava 生了。

しかし、依拠資料が、黒龍江方言と嫩江方言のどちらであるか不詳であり確かなことは言えません。

破擦音をめぐる三つの問題

中村：これまでの議論によると、破擦音について、次の三つの問題がありそうです。なお、有声性の有無は、ここでは便宜として無視します。

①現代方言では、満文 c, j に相当する音について、そり舌音 [tʂʰ, tʂ] と、舌面的な音 [tɕʰ, tɕ] (もしくは [tʃʰ, tʃ]) となる。この二種の音を、一つの音韻 /tʂʰ, tʂ/ と理解し得る方言と、二つの音韻 /tʂʰ, tʂ/ と、/tɕʰ, tɕ/ (もしくは /tʃʰ, tʃ/) と理解し得る方言がある。17 世紀の満洲語文語としては、どちらがふさわしいか。

②現代方言では、満文 c, j に相当する音について、狭い母音が後続しない場合、全てそり舌音 [tʂʰ, tʂ] とする。17 世紀の満洲語文語としては、そり舌音 [tʂʰ, tʂ] と舌葉音 [tʃʰ, tʃ] の、どちらがふさわしいか。

③現代方言では、満文 c, j に相当する音に狭い母音が後続する場合、[tɕʰ, tɕ] と表記する文献と [tʃʰ, tʃ] と表記する文献がある。17 世紀の満洲語文語では、どちらがふさわしいか。

過去の漢語資料の質について

吉池：我々が扱える過去の資料は限られています。これまで、『満漢字清文啓蒙』(1730 年題)、『正字通』の「十二字頭」(1670 年撰)、『寧古塔紀略』(1721 年著。1664 年から 1681 年に習得した満洲語の音訳漢字)を利用しました。前回のような、気音の有無の検討であるならば、全濁音声母(破裂音・破擦音の有声音)の無声化に伴う気音の有無に気を付けさえすれば、全清音声母(破裂音・破擦音の無声無気音)と次清音声母(破裂音・破擦音の無声有気音)は、いずれの地域であれ、いずれの時代であれ、大きく変わることは無いので、利用できます。

中村：しかし、漢語のそり舌音・舌葉音・舌面音という声母は、地域や時代により大きく異なります。上記の三つの資料は、満洲語の音質(そり舌音・舌葉音・舌面音)の検討にとって有効であるか否かという問題があります。

『満漢字清文啓蒙』の漢語の質

吉池：『満漢字清文啓蒙』(1730 年題)について、早くは太田辰夫(1950)²¹が北京語と認定しています。また、落合守和(1987)²²は、太田辰夫(1969)²³が挙げる清代北京語の 7 つ

²¹ 太田辰夫(1950)「清代の北京語について」『中国語学』34、1-5 頁。

²² 落合守和(1987)「『満漢字清文啓蒙』に反映された 18 世紀北京方言の音節体系」『静岡大学教養部研究報告 人文・社会科学篇』22(2)、111-151 頁。

²³ 太田辰夫(1969)「近代漢語」『中国語学新辞典』東京：光生館、186-187 頁。

の語法特徴のうち6つと合致することにより、北京方言に基礎を置く資料とします。

中村：語彙・語法が北京語であるならば、音についても、北京語を反映するもの見て、満文 c, j が、そり舌音・舌葉音・舌面音のいずれかという音質の検討に、利用できるでしょう。

『正字通』「十二字頭」の漢語の質

吉池：それに対して、『正字通』の「十二字頭」（1670年撰）に、贛客家方言が反映している部分があることについては前回確認しました。

中村：そり舌音・舌葉音・舌面音という声母の差異は、南北音の差は大きなものとなっています。『正字通』「十二字頭」の利用は難しいのではないのでしょうか。

吉池：『正字通』「十二字頭」を見ると満文の ci-, ji- に対して全て所謂尖音の漢字を使用しており、団音の漢字は一つもありません²⁴。現代の贛客家方言を見ると、団音の漢字は [k^{hi}-, ki-] であり、北京語のように舌面音 [tɕ^h, tɕ] とはなっていません。おそらく当時であっても団音は [k^{hi}-, ki-] であったため、団音の使用は避けたのでしょう。たしかに、『正字通』「十二字頭」は、満文 c, j の音声の検討にとって有効であるかどうか疑問です。

中村：『正字通』「十二字頭」の検討は、取りやめましょう。問題は『寧古塔紀略』の音訳漢字の音をどのように見るかということです。

『寧古塔紀略』の漢語の質

吉池：『寧古塔紀略』（康熙六十年[1721]）の著者吳振臣について、竹越孝(1998)²⁵は、父の兆騫が故郷の母親に、振臣の様子を知らせる書信を紹介します。それによると、吳江の漢語方言を話し、“官説”（漢語の官話（役人の言葉）か）や満洲語を習得していく様子を窺うことができます²⁶。寧古塔は現在の黒龍江省寧安市の牡丹江中流部に位置し、国事犯の流配置とのことです。父親の吳兆騫は、同じ境遇の文人たちと詩社を結成するなどしたようですから、寧古塔には漢人の社会があり、子の振臣も、その漢人の社会の中で育ち“官説”

²⁴ 『正字通』影印、北京：中国工人出版社、1996年。巻頭に満文「十二字頭」がある。第一字頭（子音+母音）：ci 七、ji 脊。第二字頭（子音+母音+i）：cii 棲、jii 脊矣。第四字頭（子音+母音+n）：cin 親、jin 津。第五字頭（子音+母音+ng）：cing 清、jing 晶。第十字頭（子音+母音+o）：cio 秋、jio 揪。なお、第三、六、七、八、九、十一、十二字頭に漢字音注は無い。

²⁵ 竹越孝(1998)「『寧古塔紀略』に見られる漢字音写満洲語語彙」『鹿大史学』45、1-19頁。

²⁶ 「蘇還甚聰明，已能讀詩經四五句矣。原說吳江鄉談，官説及滿洲話也説幾句，常叫道快回去見親娘。（『歸來草堂尺牘』所収「上母親書）」竹越(1998)3頁。

を習得したのでしょうか。

中村：そうすると、呉振臣は、寧古塔の漢人社会で使用された“官説”なるものを習得し、その“官説”によって、満洲語口語を音写したと見て大過はない。

吉池：そうですね。『寧古塔紀略』が公にされたのは、60歳の頃（康熙六十年・1721）のことですが、漢字音訳満洲語の資料自体は、寧古塔に居た時に作られたと想像します（呉氏本人によるものか、漢人社会で使用されていたものか分からない）。仮に帰郷後だとしても、それほど時を経ずに作られたものでしょう。60歳の頃に満洲語を思い出し漢字で音訳したとは考えにくい。

中村：18歳まで北方の漢人社会で育ったわけですから、北方の“官説”によって満洲語口語を音写したメモを作成した、と見て特段の不都合はありません。前回に検討したように、旧濁音字の使用を避けているわけですが、それは後に調整したものでしょう。

吉池：問題は、その北方の“官説”が、北京語と比べてどの程度の違いが有った、もしくは同様であったか、ということです。現代の黒龍江省の漢語方言音が参考になるかもしれません。

中村：たしか陳章太・李行健(1996)²⁷がありましたね。

吉池：陳章太・李行健(1996)によると、黒龍江省の調査地点として、哈爾濱、齊齊哈爾、佳木斯、黒河の四箇所を挙げます。残念ながら寧安市はありません。哈爾濱は省都で、寧安市の西側に位置します。齊齊哈爾は、哈爾濱のさらに西側です。佳木斯は、寧安市の北に位置します。黒河は黒龍江省の西北の外れに位置します。

中村：そり舌音、舌葉音、舌面音という微妙な音について、四つの地点の様子は如何でしょうか。

吉池：陳章太・李行健(1996)の記述によると次の通りです。

- ・哈爾濱の52歳と30歳のインフォーマントの語音は、比較的“普通話”（北京語音）に近く、破擦音には[ts, ts^h]と[tʂ, tʂ^h]と[tʃ, tʃ^h]が揃っている。
- ・齊齊哈爾の30歳と20歳のインフォーマントの語音も、比較的“普通話”（北京語音）に近いとのことであるが、破擦音は[ts, ts^h]と[tʃ, tʃ^h]のみで、そり舌音は全て[ts, ts^h]に合

²⁷ 陳章太・李行健主編(1996)『普通話基礎方言基本詞彙集 語音卷上』北京：語文出版社。

流している。

・佳木斯の 44 歳のインフォーマントの破擦音は、齊齊哈爾と同様で、そり舌音は全て [ts, tsʰ] に合流し、[ts, tsʰ] と [tɕ, tɕʰ] のみである。しかし [ts, tsʰ, s] は、時に、そり舌音で読まれる。

・黒河の 48 歳のインフォーマントの破擦音は、哈爾濱と同様で、[ts, tsʰ] と [tɕ, tɕʰ] と [tɕ, tɕʰ] が揃っている。しかし [ts, tsʰ, s] と [tɕ, tɕʰ, ʂ] を含む音節の内、或る者は混同する。

中村：インフォーマントの年齢から見て、“普通話”（北京語音）での教育が浸透していることが予想されます。音韻変化とは別の要素も考えなければなりません。とくに、省都である哈爾濱は“普通話”の影響は小さくないでしょう。それでも、齊齊哈爾や佳木斯のように、体系として、そり舌音を持たないものが有ることは興味深い。

吉池：体系としてそり舌音を持たない齊齊哈爾や佳木斯の [ts, tsʰ] には、本来の精組の声母の外に、莊組 2 等と章組 3 等の声母が含まれるわけですが、莊組 2 等と章組 3 等が [ts, tsʰ] に合流する前はどのようなようであったか。とくに、今から 300 年ほど前の黒龍江省寧安市一帯で話された“官説”ではどのような音であったか、[tʃ, tʃʰ] か [tɕ, tɕʰ] か、それとも現代と同様に [ts, tsʰ] であったか。なかなか複雑な想定をしなければなりません。

この点については、『寧古塔紀略』の満洲語口語と音訳漢字との対応を検討することにより浮かび上がってくるのでしょうか。今の時点で、音訳漢字の側から見て、満洲語口語の破擦音の音価を検討するのは困難のように思います。

中村：17 世紀の満洲語文語の音価を知るという点では『寧古塔紀略』（1664 年から 1681 年に習得した満洲語）は検討したい資料ですが、それを音訳した黒龍江省の当時の“官説”の実態が今一つ明瞭で無いことも確かです。残念ですが、『寧古塔紀略』の検討は後の課題として取りやめ、現代方言と 18 世紀初頭の『滿漢字清文啓蒙』（1730 年題）の検討に止めておくことにしましょう。

『滿漢字清文啓蒙』（1730 年題）の満洲文字と漢語破擦音

吉池：『滿漢字清文啓蒙』（雍正庚戌(1730)程明遠題）の 12 の字頭中の ㄆ c と ㄑ j に対して、どのように漢字音を当てるかを見ると、ㄆ c に現代北京語のそり舌音の有気 [tɕʰ] と舌面音の有気 [tɕʰ] が対応し、ㄑ j に現代北京語のそり舌音の無気 [tɕ] と舌面音の無気 [tɕ] が対応します。次の通りです。なお、各漢字に『漢語方音字彙』の現代北京語音を付します。

『字彙』に当該の漢字が無いばあい、『新華字典』の音形を『字彙』の音声記号に直して音価を付す。

第一字頭(子音+母音)：

ㄆ c : ca 差 [tɕʰa]、ce 車 [tɕʰy]、ci 七 [tɕʰi]、co, cū 綽 [tɕʰuo]、cu 出 [tɕʰu]。

ㄟ j : ja 渣[tʂa]、je 遮[tʂy]、ji 飢[tei]、jo, jū 拙[tʂuo]、ju 朱[tʂu]。

第二字頭(子音+母音+i) :

ㄞ c : cai 釵[tʂʰai]、cei 車衣切[tʂʰy][i]、cii 七衣切[tʂʰi][i]、coi, cui, cūi 吹[tʂʰuei]。

ㄟ j : jai 齋[tʂai]、jei 遮衣切[tʂy][i]、jii 飢衣切[tei][i]、joi, jui, jūi 追[tʂuei]。

第三字頭(子音+母音+r) :

ㄞ c : 漢字音注無し。ㄟ j : 漢字音注無し。

第四字頭(子音+母音+n) :

ㄞ c : can 攙[tʂʰan]、cen 嗔[tʂʰən]、cin 親[tʂʰin]、con, cun, cūn 春[tʂʰuən]。

ㄟ j : jan 占[tʂan]、jen 珍[tʂən]、jin 襟[tʂin]、jon, jun, jūn 諄[tʂuən]。

第五字頭(子音+母音+ng) :

ㄞ c : cang 昌[tʂʰaŋ]、ceng 稱[tʂʰəŋ]、cing 清[tʂʰiŋ]、cong, cung, cūng 冲[tʂʰuŋ]。

ㄟ j : jang 章[tʂaŋ]、jeng 征[tʂəŋ]、jing 精[tʂiŋ]、jong, jung, jūng 中[tʂuŋ]。

第六字頭(子音+母音+k) : ㄞ c : 漢字音注無し。ㄟ j : 漢字音注無し。

第七字頭(子音+母音+s) : ㄞ c : 漢字音注無し。ㄟ j : 漢字音注無し。

第八字頭(子音+母音+t) : ㄞ c : 漢字音注無し。ㄟ j : 漢字音注無し。

第九字頭(子音+母音+b) : ㄞ c : 漢字音注無し。ㄟ j : 漢字音注無し。

第十字頭(子音+母音+o) :

ㄞ c : cao 抄[tʂʰao]、ceo 抽[tʂʰou]、cio 秋[tʂʰiou]、coo 綽幽[tʂʰuo][iou]、cuo 出幽[tʂʰu][iou]、cūo 綽幽[tʂʰuo][iou]。

ㄟ j : jao 招[tʂao]、jeo 州[tʂou]、jio 揪[tʂiou]、joo 拙幽切[tʂuo][iou]、juo 朱幽[tʂu][iou]、jūo 拙幽切[tʂuo][iou]。

第十一字頭(子音+母音+l) : ㄞ c : 漢字音注無し。ㄟ j : 漢字音注無し。

第十二字頭(子音+母音+m) : ㄞ c : 漢字音注無し。ㄟ j : 漢字音注無し。

中村 : 満文 ci-と ji-に対する漢字の音注はなかなか興味深いものがあります。

吉池 : 満文の ci-と ji-に付された漢字音に、『中原音韻』の元代音²⁸と現代北京語音を[元代音>現代北京語音]として提示すると次のようです。

²⁸ 楊耐思(1981)『中原音韻音系』北京 : 中国社会科学出版社。

満文 ci-

- ・七[ts^{hi}>tɕ^{hi}]
- ・親[ts^{hi}ən>tɕ^{hi}in]
- ・清[ts^{hi}əŋ>tɕ^{hi}ɨŋ]
- ・秋[ts^{hi}əu>tɕ^{hi}iou]

満文 ji-

- ・飢[ki>tɕi]
- ・襟[kiəm>tɕein]
- ・精[tsiəŋ>tɕiŋ]
- ・揪[tsiəu>tɕiou]

中村：漢語のいわゆる団音（[ki->tɕi-]）と尖音（[tsi->tɕi-]）の両者を音注として付していますが、『満漢字清文啓蒙』（1730年題）の漢語では両者とも舌面音になっていたのでしょうか。

吉池：その点は、第十字頭において、満文 kio, gio, hio に、尖音の「秋」、「揪」、「羞」を当てていることからわかります。尖音の字が当時すでに舌面音と成っていたため、同じく舌面音と成っていた団音と区別がつかず、誤って、尖音の秋揪羞を満文の ki-, gi-, hi- に当てたものです。“誤って”というのは、満文の ki-, gi-, hi- には、団音の字を当てるのが前代より習慣として確立していたため、たとえ団音が舌面化していても、団音の字を当てるのが普通なのですが、第十字頭では誤って舌面音化していた尖音の字を当ててしまったということなのです。

以上によると、『満漢字清文啓蒙』（1730年題）の満文 c, j と母音との対応は次の通りです。

・ ca-, ce-, co-, cū-, cu- の c に現代北京語の [tɕ^h] が対応し、ci- の c に現代北京語の [tɕ^h] が対応する。

・ ja-, je-, jo-, jū-, ju の j に現代北京語の [tɕ] が対応し、ji- の j に現代北京語の [tɕ] が対応する。

中村：これによって、ca-, ce-, co-, cū-, cu- の c と ja-, je-, jo-, jū-, ju の j がそり舌音 [tɕ^h, tɕ] であったか、あるいは舌葉音 [tɕ^h, tɕ] であったか、ということについて決定することはできません。しかし、現代満洲語の全てがそり舌音であるからには、『満漢字清文啓蒙』（1730年題）にあっても、そり舌音と想定しておいて特段の不都合はありません。

そうであるならば、満文 c, j において出現する音声の [tɕ^h, tɕ] と [tɕ^h, tɕ] は、後続する母音の異なりによって補い合っているのです、一つの音韻 /tɕ^h, tɕ/ と理解することができます。

吉池：一つの音韻/ $t\zeta^h$, $t\zeta$ /であるとする、当時の満文 c, j の異音をどのように設定するか、が次に問題となります。そり舌音 $[t\zeta^h, t\zeta]$ と舌面音 $[t\epsilon^h, t\epsilon]$ とするか、そり舌音 $[t\zeta^h, t\zeta]$ と舌葉音 $[tj^h, tj]$ とするかという問題です。

中村：舌面音、舌葉音、舌面音という微妙な音声について、過去の資料に証拠を求めることは困難です。「これこれ」と想定したならば、都合が良いということではないでしょうか。

吉池：そり舌音 $[t\zeta^h, t\zeta]$ と舌面音 $[t\epsilon^h, t\epsilon]$ よりも、そり舌音 $[t\zeta^h, t\zeta]$ と舌葉音 $[tj^h, tj]$ の方が音声は近い。一つの音韻の異音としては、音声の近い $[t\zeta^h, t\zeta]$ と $[tj^h, tj]$ を想定したほうが自然なのかもしれません。

中村：それでは、我々の文字表に付す音声としては、満文 j をそり舌音とし、 ji を舌葉音としましょう。

今回はここまでとし、次回は外国借音のローマ字表記を検討し、訂正した文字表を提示することにしましょう。